

<報 告>

中央大学保健体育研究所公開講演会(1)

日 時：2021年7月5日(月) 16:00~18:00

開催方法：オンライン開催 (Zoom)

講 師：向 山 昌 利 氏

テ ー マ：メガイベントは開催都市に何を残すのか
—— 2019年ラグビーワールドカップを開催した
岩手県釜石市のケースから ——

コーディネーター：小林 勉 (総合政策学部教授)

コメンテーター：関根正敏 (商学部准教授)

武田作郁 (同志社大学大学院博士後期課程/

中央大学保健体育研究所客員研究員)

○**小林** それでは定刻を回りましたので、2021年度中央大学保健体育研究所、公開講演会をオンラインにて開催させて頂きたく存じます。私、中央大学総合政策学部、小林勉と申します。今回の企画委員の委員長をしております。どうぞよろしくお願い致します。本公開講演会に先立ちまして、まず当該保健体育研究所、市場俊之所長より一言ご挨拶をお願い致します。

○**市場** 今、紹介して頂きました、保健体育研究所所長の市場俊之と申します。この4月から初めての仕事に関わっております。今回のこの公開講演会は所長の私にとって外部に対しての初仕事ということになります。よろしくお願い致します。1年間、まだ続けていますが、スポーツイベント軒並み中止、延期、その一方では、望んだことかどうか分かりませんが、このようなりモートとかオンラインの可能性が模索されて来ています。今日もこのオンラインの良い点を利用しての講演会、流通経済大学の向山昌利先生にお話頂くことになっています。オリンピックを本当にやるのかどうか、あと20日程しかありませんし、その賛否について、世界の流れとか日本の流れを止めようが無いのですけれども、我々自身各々がそれに対してどのような視

点に立つべきか、あるいは視座を持つべきか、参考にするためにも、役立つ話になるのではないかと期待しております。私からは以上です。

○小林 市場所長、ありがとうございました。それでは本講演会『メガイベントは開催都市に何を残すのか』ということで、2019年、ご存知のように日本においてワールドカップラグビーが開催されました。その岩手県釜石市のケースを事例にメガイベント、レガシーとして何を残すのかということをご講演頂きます。プレイヤーにも記載させて頂きましたように、何のための、そして誰のためのスポーツイベントなのか、コロナ禍によって延期された東京オリパラ2020が2021に延期、開催の勢いが増すばかりですが、その開催を直前に控え、岩手釜石の視点から大会開催の是非を問う事も非常に重要だろうと考えております。本講演会にて、日本で開催されたそうしたメガイベントにフォーカスし、イベントによるインパクトの実際に関する考察を、皆さんと一緒に深めていけたらな、と考えております。本講演会の講師として今回、先程市場所長よりご紹介がありました、流通経済大学の向山昌利先生をお呼びしております。

簡単にご紹介させて頂きますと、向山先生は同志社大学ご卒業後、NECグリーンロケッツ等に所属しまして、日本代表ラグビーのバイスキャプテン、あとA代表ではキャプテンとして活躍するなど、アスリートとしてもかなり有名な方でございます。ご引退後は研究者としてそのセカンドキャリアをスタートなされまして、現在の研究テーマは開発とスポーツ、スポーツメガイベントと震災復興ということで、本日ご講演頂きます釜石につきましては、2012年度から長年に渡ってフィールドに足を運び、ラグビーワールドカップ後の現在におきましてもフィールドワークを続けているということでございます。ご自身、ラグビー協会で国際協力部門長や、ご自身が代表として一般社団法人子どもスポーツ国際交流協会代表理事等を務める等、ラグビーという1つの大きなツールにいかにか社会貢献活動が出来るのかという、そうした実践の現場でも大活躍されている研究者でございます。

僕の方からのご紹介はこのぐらいに致します。また今日のご講演の中でご本人から詳しい自己紹介もあるかと思しますので、大体小1時間程度ですか、向山昌利先生にはご講演頂き、その後、フロアの皆様からのご質問なり、ご意見を承りながら、当該テーマについて理解、議論を重ねていければと思います。長くても2時間弱を考えておりますので、最後までお付き合い頂ければと思います。どうぞよろしくお願い致します。それでは向山先生、ご講演の方、よろしくお願い致します。

○向山 小林先生、ご紹介ありがとうございます。皆さんはじめまして。今、小林先生よりご紹介頂きました流通経済大学スポーツ健康科学部に所属しております向山昌利です。今日は中央大学保健体育研究所、公開講演会でお話する機会を頂き、大変光栄です。今日は『メガイベ

ントは開催都市に何を残すのか』ということで、2019年に開催されましたラグビーワールドカップ釜石大会、岩手県釜石市を事例にお話したいと思います。

まず自己紹介をします。私、ラグビープレーヤーとして活動していました。プレーを辞めたのはもう10年以上前になるのですが、30歳を過ぎるまでラグビーを一生懸命頑張っていました。現在はアジアラグビーという、アジア地域を統括するラグビー協会や、日本ラグビーフットボール協会ですとか強化、国際協力等、そういったプログラムを進める担当になっております。右上は私がプレーヤーだった、もうかなり前の写真ですが、ラグビーを頑張っていた時の写真です。左上の写真は今日お話しする岩手県釜石市の方々と一緒にインドネシアとスリランカに行って、ラグビーと防災教育を組み合わせたプログラムを実施した時の記念写真です。下の写真は台湾とオーストラリアの子を岩手県に招いて、ラグビーワールドカップが開催されたスタジアムでタグラグビーという、ラグビーのいとこのようなスポーツを使って国際交流をした時の写真です。このように私はラグビーを通じて釜石に影響を及ぼしていますので、釜石の人からは「ラグビーの人」と時に呼ばれたりしています。この後、皆さんにご紹介する釜石でのラグビーワールドカップのお話は、釜石に対して何も影響を及ぼさない中立的な立場にある人による調査結果というよりも、積極的に影響を及ぼそうとしている「ラグビーの人」から見た内容であると考えて頂ければいいと思います。

今日は3つの流れで発表したいと考えています。まず最初に講演のテーマについて確認します。次にラグビーワールドカップ釜石大会についてお話しします。ここでは4つに項目を分けてお話しします。最後に東京オリンピック、東京オリパラを巡る現況を釜石の事例を基に考えていきたい、今日はこの3つの流れでお話をします。

それではまず講演のテーマについて確認します。今回の講演テーマは『メガイベントは開催都市に何を残すのか』というものですが、こうしたテーマが設定された背景には東京オリパラの開催の是非に関する今日の議論があるように思います。つまり、新型コロナウイルスが蔓延する中、東京オリパラを開催する必要があるのかどうか、開催するのであればそれは一体なぜなのか、何のためなのかという問いです。これは言い換えると、東京オリパラの開催意義が今問われているということだと考えます。そうした状況において、ラグビーワールドカップ釜石大会を調査している私に声がかかりましたので、東日本大震災からの復興に注目して釜石大会を検討し、その内容を皆さんにお話したいと思います。なぜなら釜石大会はラグビーワールドカップ開催都市の中で唯一の被災地です。被災地開催です。また東京オリパラは今、新型コロナウイルスの話題で持ち切りですけれども、実は「復興五輪」を掲げて招致活動を進めました。つまり東日本大震災からの復興という点はラグビーワールドカップ釜石大会も、東京オリパラ

も共通であると、そういった意味からここでは震災復興に注目してお話したいと思います。

具体的には下に書いてます3点を明らかにします。この3点明らかにし、最後に今問われています東京オリパラの開催意義をもう一度考え直す、そういった流れでお話をしていきます。その3点とは具体的には、1つ目に釜石大会が釜石の復興事業、復興に及ぼした影響を、被災前の釜石の状況も踏まえて明らかにしたいと思います。ラグビーワールドカップ開催構想が生まれてから開催されるまでではなく、開催される前、被災前から釜石市の状況を押さえた上で、開催の遺産を検討していきたいと考えます。2つ目に釜石市役所、行政ですね。あと市民が釜石大会を復興に利用した戦略性にも言及したいと思います。最後、3つ目に震災復興という特殊な状況における大会の影響としての遺産を検討します。一般的な都市の再開発のためにスポーツ・メガイイベントを利用するのではなく、震災復興、被災した都市が大会を開催する際に求められる観点を指摘したいと考えています。それではここからラグビーワールドカップ釜石大会の話をしていきたいと思うのですが、少しでも事前準備をさせてください。

岩手県釜石市ってどんなところだろうということを考えていきたいと思います。釜石で開催されたラグビーワールドカップの話をするためには、まず釜石について知る必要があるからです。こう考え、イメージしてもらったらいと思うのですが、例えば東京都、東京スタジアムですね、あとは神奈川県横浜市の横浜国際総合競技場といった大都市の大きなスタジアムでやる大会と、今回お話しする地方小都市である釜石市で開催される大会、またその影響は遺産ですね、違うだろうということはイメージ出来ると思います。加えて今回は被災地での開催ですので、より深くその被災の影響を検討する必要があります。スライドにして8枚分、釜石について説明したいと思いますので少しお付き合いください。

岩手県釜石市に行かれた方というのは少ないのではないかなと思います。そこで一体日本のどこに釜石があるのかということをもまずご紹介します。これは釜石がラグビーワールドカップ開催を機に作ったリーフレットから持って来たものです。釜石は東京からだと新幹線で、盛岡もしくは新花巻まで行き、そこから在来線に乗り換えて海の方に行くという道りになります。このリーフレットの真ん中に日本地図があると思いますが、乗り換えをする時間を考慮すると、東京からだとも5時間ぐらいかかるような場所です。

もう1つここで覚えておいて頂きたいのが、海沿いにあるので、今日お話しする津波の被害が何度もある地域であると共に、逆に海に恵みをもたらしてもらっている地域でもあります。その点に関しては、漁業ですが、後程お話ししたいと思います。この写真は釜石の駅前にある製鉄所の写真です。右の方に「ようこそ！！鉄と魚とラグビーの街 釜石へ」と書いてありますが、「釜石は鉄と魚とラグビーのまち」というキャッチフレーズを掲げています。ですので、その3

点からまず釜石を説明していきたいと思います。

釜石の1つ目の特徴は鉄です。なぜ鉄が特徴か、その歴史を振り返ってみますと、釜石には山があり、そこに鉄鉱石が豊富にありました。またそれを溶かすために当時は炭が必要だったんですけれども、その炭を作るための木材が豊富にあった。そういった条件が重なって、日本で初めて洋式高炉、つまり当時最先端の高炉が建設されます。当時の釜石の日本の中での位置付けを皆さんにイメージしてもらう1つの話として、釜石に鉄道が開通したんですね。それは1880年です。この鉄道の開業は東京―横浜間、そして京都―神戸間に次ぐ、日本で3番目の鉄道の開通でした。そういった点からも、当時の釜石が、どれほど重要な都市の1つだったかということを理解出来ると思います。

そして「鉄のまち」として発展を続ける釜石ですが、1945年、第二次世界大戦後の日本の復興とその後直後に発生した朝鮮戦争による特需ですね。鉄が必要になった、戦争のために。その特需によって釜石は東北随一の工業都市となります。今日後程お話すラグビーとも関わっているのですが、新日鉄釜石製鉄所の企業城下町として発展していきます。製鉄所はいろいろな名前が変わっていますが、ここでは新日鉄釜石ということで話を続けていきたいと思っています。1960年代には公式に登録された住民票では9万人弱、実際には10万人を超えると言われていましたが、それぐらいの人口を誇った釜石の約3割が製鉄所の従業員やその家族と言われていました。協力会社を含めると1万人以上の人達が製鉄所の関係者で、その家族を含めると3万人ぐらいになると、3人に1人は製鉄所の関係者だと言われていました。そのように「鉄のまち」として発展した釜石ですが、1960年代半ばからいろいろな要因を背景に新日鉄本社の経営合理化が進められ、石を溶かす釜石事業所の高炉が停止されたり、従業員が名古屋等、他の事業所に転出していきます。先程お話ししたように、関係会社を含めると1万人以上を誇った、従業員だけでも8千人を超えた釜石製鉄所の従業員の数が震災前年の2010年には223人にまで減ってしまいます。それ程急激に規模が小さくなってきました。そういったことから「鉄のまち」という特徴が、被災前の2010年頃にはもう失われつつあったと言えます。

釜石の2つ目の特徴は魚です。釜石は海に近いというお話はしましたが、その沖合には世界3大漁場の1つ、三陸漁場があるんですね。たくさんの魚が獲れる。その漁場基地であった釜石は漁業をもう1つの基幹産業として発展します。しかしこれも長くは続きません。好調も長くは続かない。要因として、例えば1970年代のオイルショックですね。それによって当時釜石の漁業の主力であった遠洋漁業、遠くの海まで行って魚を獲って戻って来るということが、燃料費の高騰によって採算が取れなくなった。そうした要因によって釜石の主力の漁業が衰退していったというのが1つの要因。また、もう1つお伝えすると、1980年代に始まった海産物の

輸入自由化, それによって海産物の価格が急落してそれも釜石の漁業の衰退を早めた。こういった要因から, 釜石の漁業も, 「鉄のまち」の釜石と同じような結果となります。就業者の高齢化, 後継者不足に見舞われるんですね。それによって縮小する日本漁業全体の縮図と, 釜石の漁業は言われるまでになります。

3つ目の特徴はラグビーです。先程もお話した新日鉄, そこにはラグビー部があり, そのラグビー部は1979年から85年にかけて日本一, 7連覇を果たします。この時期は先程お話した鉄や魚といった釜石の基幹産業が縮小する, 釜石にとって厳しい時期だったんですね。そういった時期だからこそ, ラグビー部が勝利する, その活躍は市民にとって, 市にとって大きな誇りとなったわけです。そうした新日鉄釜石ラグビー部という強豪チームと, それを熱狂的に応援する市民の姿が全国に発信され, 釜石は「ラグビーのまち」として有名になっていきます。しかしこれも7連覇以降, 新日鉄ラグビー部は優勝から遠ざかり, 時間が経過すると共に, 新日鉄ラグビー部7連覇の記憶は薄れつつありました。

最後に釜石市の人口減少と少子高齢化の進行について話をさせてください。これは釜石市の人口動態構成比, 年度によってどのように人口の状態が変わっていったのかということを示すグラフです。まず青のグラフに注目してください。これは釜石市の人口ですが右肩下がりがよく分かると思います。これは1960年ですので, 釜石製鉄所が経営合理化を始め, 従業員が他の事業所に移って行った時期ですね。それから一貫して釜石市の人口も減り続けています。次にオレンジ色のグラフに注目してください。オレンジ色のグラフは15歳から64歳の人口, 言い換えると, 働ける人の数なんですね。この働ける人の数も一貫して減少していきます。続いてグレーの線に注目してください。この線は15歳未満の子どもの割合です。こちらも一貫して低下していきます。これはなぜなのかというと, 製鉄所の従業員が他事業所に移転するという話はしましたけれども, 例えば30代, 40代, 50代の人達が他事業所に行くわけですね。ということはその家族の人と一緒に釜石を去るわけです。ですので, 人も減るし, 若者も減るし, 子どもの割合も減っていく, といった結果となります。よって, 最後に見て欲しいのですが, 黄色の線, これは高齢化率。釜石に残されるのは高齢者だけになりますので, 高齢化率は上昇していくということです。

私は経済の専門家ではないのですが, この人口減少と少子高齢化が, 経済成長にとって, 負の影響を及ぼすと言われていました。ですので, 人口減少と少子高齢化の是正が釜石の課題となっていました。ちなみに2010年, 震災の1年前ですね。その青い棒グラフを見て頂きたいのですが, 釜石の人口は被災前年に4万人弱になっていたということです。こうした鉄や魚といった基幹産業の衰退によって, 人口減少と少子高齢化が進んでいきます。こういった人口減少と

課題に対して、被災前の釜石行政は特定の業種に依存しない、つまり鉄とか魚に依存しない複合産業都市、いろいろな産業を束ねてまちの雇用を増やしていこう、産業を発展させていこうということを試みていました。こうした状況の中で発生したのが東日本大震災、2011年のことです。この写真は釜石の沿岸部の写真です。もう全てが津波によって洗い流され、奪われ、失われてしまった。壮絶な状況が理解出来ると思います。4万人弱の釜石において1,000人以上が亡くなりました。人口の1/4に当たる1万人以上の方々が住まいを離れないといけない危機的な状況に陥りました。このような壮絶な被害の数か月後から実は、ラグビーワールドカップの招致活動が進められます。こんな状況でラグビーワールドカップの交渉が始められていきます。なお、左上に、これ矢印見えますかね？ここに建物が見えると思うのですが、ここの建物とこちらの建物ですね。これが小・中学校なんですね。ここにラグビーワールドカップのためのスタジアムが建設されることになります。

以上が釜石の文脈ですね。釜石がどういったまちなのかということを確認しました。ここからラグビーワールドカップに関して釜石市役所の視点で話をしていきたいと思います。ラグビーワールドカップの招致、そのような構想が生まれてから、開催までの過程を釜石市役所の視点から捉えるということです。まず最初に確認したいのは、ここに示していますように、行政担当者の言葉の通り、東日本大震災によって、被災前から存在していた雇用とか、人口に係る課題が更に悪化したと。行政は被災前の姿、状態に釜石を戻すだけでは従来からの課題は残されたままになるため、そうした従来からの課題、産業構造の転換とか少子高齢化、人口減、そういった課題の是正に向けた取り組みも求められるようになっていきます。行政がそのような、従来からの課題解決に取り組むよりもっと前ですね、行政が人命救助、食事の確保、避難場所の確保、瓦礫の除去といった危機対応を進めていた頃、2011年夏頃からラグビーワールドカップ開催構想が検討されていきます。このスライドは震災から約1年後の2012年2月に撮った写真です。下にある文章はその2012年に掲載された新聞記事です。この新聞記事に書いてあるように、瓦礫の丘でラグビーワールドカップをやると、でもやっていいのかな、出来るのかな、こういった状況の中で、ラグビーの開催交渉が進められていきます。ではここで、釜石市役所が作成した公式記録映像ですね、釜石ラグビーのまち推進事業公式記録映像を皆さんに見て頂いて、釜石行政の視点から釜石開催が終わるまでの記録を確認して頂きたいと思います。この映像は釜石市役所、行政の方に譲って頂いたのですが、youtube公式チャンネルに「ラグビーのまち釜石」というものがありますので、機会があれば是非のぞいてみてください。それでは映像を流したいと思います。

(映像視聴)

公式記録映像を見て頂いて、震災から開催までの過程を理解して頂けたと思います。ここでは開催意義を改めて確認したいと思います。釜石大会の開催意義は3つあると考えます。1つ目に震災を乗り越え、復興のシンボルとなること。2つ目に世界中に感謝を表明すること。そして3つ目に子ども達に夢と希望を与えることです。それぞれ検討していきたいと思うのですが、まず最初の、震災を乗り越え復興のシンボルとなるという点に関しては後程詳しく検討していきたいと思いますので、2つ目、3つ目については簡単に検討したいと思います。2つ目の世界中に感謝を表明する点に関しては映像にありましたように、子ども達が作詞した『ありがとうの手紙』というものを合唱したり、また大会の直前に黙祷をしたり、そういったことを通じて感謝を表明したことが言えると思います。この『ありがとうの手紙』の合唱ですとか、黙祷の時間を取る、もちろん作詞することは難しいですが、それ自体は難しいことではないか、と思われる方もいらっしゃると思うのですが、ラグビーワールドカップ、メガイベントとなると、スポンサーへの配慮などから開催前の時間は秒単位で計画されています。そこに釜石だけ歌を歌うための曲を流すとか、黙祷の時間を取るということは有り得ない、当初認められませんでした。しかし行政の方々の粘り強い交渉によって開催数日前に認められた。それぐらいの苦勞があって実現した、世界中に感謝を表明するということが果たされたと考えられます。3つ目の子ども達に夢と希望を与えるという点に関しては、十分に検討出来てないのですが、子ども達、小・中学生が大会後に作文を書きました。それを読ませてもらうと、夢や希望、勇気に繋がったという点が記載されています。こういった点から、世界中に感謝を表明する、子ども達に夢と希望を与えるという後者2点に関しては果たされたと考えてもいいように感じています。

次にここでは簡単に震災から開催までの過程を整理したいと思います。赤色の文字に注目して頂きたいのですが、ここでお伝えしたいのは2019年の開催までにインフラ整備が完了しているという点、連続して復興を感じられるような時間軸、スケジュールになっています。メガイベントが開催までに大会に必要なインフラ整備を促進する、推し進めるという点はよく指摘されますが、釜石大会も例外では無かったということです。開催によって、インフラ整備を促進させることを行政は狙っていました。こうした復興戦略、復興のためにインフラ整備を進める、促進させるぞと、その為に大会を呼ぶぞという戦略性は上にあります行政担当者の言葉からも明らかです。東日本大震災の被災都市としての釜石にとって、被災後のインフラ整備の促進は大きな意味を持っていました。なぜなら、インフラ整備を進めるための人材、資源、資材、お金、そういったものが不足して復興事業の遅延が度々発生していたからです。そういうふうに資源がなぜ不足するのかと。その理由には大きく2つあると思います。1つ目は今日のもう1

つのテーマである東京オリンピックです。その開催によって東京都のインフラ整備が開催を目途に、推し進められます。東京の方が資源も高く売れると、例えば人材であればそちらの方が時給がいいということで、東京に人も物も奪われてしまう。その競争に打ち勝たねばならなかった。2つ目は今回の東日本大震災の特徴として、広い地域が被災してしまったと、災害にあったということが挙げられます。それは三陸地域の多くの土地が被災して復興に取り組んでいるので、その都市間の競争もあったということです。そこで釜石市は国家事業に準じるラグビーワールドカップを招致することで、政府による資源の投入を期待したと、そういった戦略を取ったと言えます。実際、下に書いてありますように、当時の首相、安倍首相は開催までのインフラ整備完了に最大限に協力すると表明しています。こうして2019年の開催を目途に整備されるスポーツスタジアム、交通、高速道路や鉄道、また水門とか防潮堤、安全に関わるインフラは釜石の目指す複合産業都市化のための基盤になるという意味でも重要でした。

(映像を見ながら)

ここで安全に関わるインフラである水門と防潮堤について、なかなか見ることが無いと思いますので少し補足説明をしたいと思います。これはドローンの映像で、左手にスタジアムがあります。下に見えてきたのが水門です。これは14.5メートルあり、東日本大震災の時と同じ巨大津波が来ても、それに耐える構造になっています。大きさが分かりにくいと思うのですが、横に今、車が走っていますが、これと比べて頂けると少しイメージ出来るかなと思います。震災時はこの中央の川を逆流し遡上して、この奥にある地域を破壊しました。ちなみにここに新しい小・中学校が出来ています。これは水門の横にある防潮堤ですね。これも14.5メートルあります。大きさはなかなか分からないと思うのですが、この左上に軽トラックが停まっているんですね。これは14.5メートルですから5階建てのビルの屋上に軽トラックが停まっているとイメージしてもらえば大きさが理解出来ると思います。こんな巨大な水門や防潮堤が数年間で出来てしまったと、この奥には空き地が広がっていると、こういった状況に今あります。

先程巨大な防潮堤、水門が数年で出来たと、開催を目途に完成したという話をしましたが、次にスポーツメガイイベント開催に際して、よく負の遺産とされるスタジアムの整備について確認したいと思います。負の遺産とされるという意味は、莫大なお金をつぎ込んで整備をすると、そういったことに対する批判です。整備費は金額で約45億円かかりました。しかし、政府からの交付金や、日本スポーツ振興センターからの助成金の活用、また岩手県の負担もあり、49億円のうちの46億円をカバーしてもらいました。釜石の負担は約3億円となったんですが、その3億円のうち、2億円は寄付金によって賄われました。ラグビーこども未来基金というものを釜石市は設立してまして、そこに5億円寄付を受け、そこから2億円支出しました。よって

釜石の実質の負担は1億円となりました。これから年間3千万から4千万と言われる維持費負担が続くのですが、釜石側の膨大な支出によってスタジアムを整備したということは無いと言えると思います。これまで行政視点から大会の遺産を検討してきましたが、まとめると次のように表せると思います。1つ目は感謝の表明ですが、これは感謝を表明しつつ、国際的な存在感も向上させたと言えると思います。2つ目に夢と希望の醸成ですね。子ども達に対して夢と希望を与えることができました。3つ目は、今、特に注目してお話しましたように、2019年を目途にインフラ整備が進んだということです。

それではここからは釜石市民の視点から釜石大会を捉えていきます。これは釜石市の地区割なんですけれども、今回事例として取り上げるのは、釜石の北東、地図の右上にあります鶴住居地区です。この鶴住居復興まちづくり協議会に注目してお話したいと思います。ここにスタジアムが建ちました。先程の小学校があった地域です。

まず鶴住居地区の被害を確認したいと思います。赤字に注目してください。釜石市で最も大きな被害を受けた地域です。地区住民の8.8%、乱暴に言うとも10人に1人ぐらいの方が亡くなりました。市の被災者数、死者に対する割合も6割を超えます。死者の数だけではなく、6割以上、7割近くの家が破壊されました。こういった方々が被災後からラグビーワールドカップ開催構想を耳にしていくわけなのですが、それは被災から1年ぐらい経った頃からだと思われま。耳にすると言いましたが、どういったことかと言うと、先程紹介した1年後の新聞記事、瓦礫の丘でラグビーワールドカップをと書いてありましたが、そういった新聞で目にしたり、あとは右に示しています。これは行政が出した復興計画案なのですが、その左下にスタジアムが見えると思います。ラグビーのボールも立っていますけれども、こういった資料を通じて、ラグビーワールドカップを少しずつ耳にし、目にしていったというプロセスでした。そういった構想に対して鶴住居の人達は、自らがその当時、仮設に住んでいた住民の方々の生活再生よりも、ラグビーワールドカップ開催構想の方が先に進んでいると感じ、開催に関して、苛立ち、反対を示すようになります。議論そのものも難しい時期でありました。中央に書いてありますように、浮き足だったような、はしゃぐ話は出来ないということです。

しかし、開催構想に反対していた住民も、最終的には開催構想を受け入れるようになります。この過程にはものすごく複雑な過程があるのですが、それは話す時間が足りませんので、今回は最終的には住民が受け入れるようになったという点で整理したいと思います。その受け入れるようになった理由ですけれども、それは仮設住宅から通常の住宅に戻るために欠かせない土地の引き渡し、またはその土地の安全を確保する、先程お見せした水門とか防潮堤の整備が度々遅れて、見通しが立たない状況が続いたんです。それに歯止めをかけようということで、

ラグビーワールドカップの開催構想の推進を非常に要望するに至ります。仮設住宅住まいを非常時と考える住民が、1日も早く通常の住宅に戻りたいという思いを釜石大会に託したと言えます。

住民の心情の複雑性は、開催が決定した際の対応からもよく分かります。開催が決定した際に、上に書いていますように、住民は喜ぶどころか、その開催決定に参ってしまうんですね。この記事は鶴住居地区の住民が自ら作る地域新聞の記事です。ですので、住民の方の声がダイレクトに示されていると思います。しかし、そうした複雑であり、当初反対し、反発し、開催が決まっても参ってしまう、そういった状況だった住民の心情も、2019年の開催に向けて、インフラの整備が進められる、まち並みが変わっていくことによって、開催の1年前に共同研究者と実施した量的調査、アンケート調査では、約6割の鶴住居住民が大会を評価するまでになりました。そうして迎えた大会の様子は先の記録映像で確認して頂きましたので、ここでは翌日の新聞を確認したいと思います。これは全て鶴住居地区住民を主役として書かれた記事の抜粋です。全て第1戦の翌日に出されました。これを読むと「ラグビーワールドカップが釜石の復興を更に加速させる。」と朝日新聞。2つ目の毎日新聞は「身体を張ってボールを繋ぐ姿が復興を象徴するかのようで、亡くなった奥さん、母ちゃんが喜んで思う。」と。読売新聞は「大きな大会、メガイベントを開催出来るまで地元が復興して嬉しい。」といった記事が並びます。こういった記事を読むと、私は震災復興が果たされたというような思いを持ってしまいます。

これまで市民視点から大会の遺産を検討してきましたが、市民は行政よりも、より生活に密着した住まいという点から復興を求めていたということが分かります。その住まいの獲得を実現させるための基盤となる安全な土地、それを確保するための防潮堤や水門のインフラ整備を2019年を目途に獲得すると、それは開催によって実現したと、その獲得が市民視点の遺産だと言えると思います。以上、行政視点、釜石市役所の視点から、また市民の視点から釜石ラグビーワールドカップ開催とその遺産を考えてきましたが、ここからは震災復興という釜石の特殊性を考えたいので、釜石大会の遺産を改めて検討したいと思います。

復興とは何かということですが、復興とは被災地に住む人々の生活の再生、これは関西学院大学の災害復興制度研究所の所長を務めた宮原が定義したのですが、これは具体的に言うと3つあります。1つ目に雇用に関わる暮らしの再生、2つ目に住まいの再生、これまで私は通常の住宅と言ってきました。仮設ではない通常の住宅を獲得するという。そして3つ目に人と人との繋がりを意味するコミュニティの再生です。この3つが果たされてはじめて復興が成し遂げられると定義されています。では、こうした復興の定義から釜石大会をもう一度捉えなおしてみたいと思います。まず1つ目の暮らしの再生に関してです。複合産業都市化を目指

す釜石にとって、基盤整備、インフラ整備、特に交通インフラ整備は複合産業都市化を押し進める基盤となります。それによって物流拠点としての発展の可能性が今見えてきています。但し、それによって複合産業都市化が果たされたとは決して言えない状況にあります。釜石市役所、行政が期待したツーリズムですね。交通インフラ、スポーツ施設を利用したスポーツツーリズム。ツーリズム産業も、コロナの影響によって今、足止めを食らっている状況です。加えて、経済成長に影響を及ぼすとされる人口減少なんです。2015年から2020年にかけて、13%の人口減少がありました。これは岩手県で最大です。なぜこういった減少が起こったのかということを見ると、復興事業に従事していた人々、この大きなインフラを整備するために釜石に住んでいた。たくさんの人達が、政府が定めた復興期間が終了し事業がひと段落したことによって、釜石を離れたと考えられます。つまり、被災後の釜石の1つの大きな産業だった建設業等、復興事業に関わる産業は縮小したと考えられます。加えて、復興事業に従事していた働き手が出て行ったということは、もしかするとその方々と一緒に暮らして居た家族も一緒に釜石を出たと考えられますので、同時に高齢化を進める要因ともなります。こういった点を見ると、釜石の暮らしの再生は途上であったと言えます。

次に2つ目、住まいの再生に関してです。ここでは3つ目のコミュニティの再生も一緒に検討したいと思います。被災前に鵜住居地区に住み、被災後に土地が再生して区画整備がなされて、最後に再び鵜住居地区に戻って来た住民の割合は50%です。600世帯あったのですが、戻って来たのは300世帯です。そのため住民の言葉にあるように、2019年を目処に急ピッチでインフラ整備は進み、ハードとしてのまちは出来ましたが、そこに住む人が少なく閑散としていると。そういった状況にあります。

ここで鵜住居地区に戻って来た世帯の数だけではなく、戻って来た時期にも注目すると、もう1つの困難性も浮き彫りになります。これは鵜住居地区に戻って来た世帯数の推移を表した、世帯数の変化、推移を表したグラフです。オレンジ色は復興集合住宅に戻って来た世帯の数です。鵜住居地区は元々一戸建てが多かったんですね。但し、いろいろな事情によって、集合住宅に戻られる方が一定数居て、その方々が戻られた時期と世帯数の推移です。青色は自宅再建を果たした世帯の数の推移ですね。このグラフを通じてお伝えしたいのは2点です。1点目は赤字で2019年と書いていますが、ラグビーワールドカップが開催された2019年においても地区に戻りたくても、戻っていない方々がいらっしまったということです。つまり、釜石大会が開催されて、新聞で復興が暗示されたその時期においても、鵜住居地区の住まいの再生は途上であったと言えます。2点目は地区への住み戻りは2016年頃から本格化していますが、この中で特に自宅再建に注目すると、そのピークは2018年です。2018年とは釜石大会の1年前ですね。

被災によってバラバラにされた、一度破壊されたコミュニティを再構築するためには一定の時間が必要とされています。果たしてそれがどれぐらいの期間かということを確認することは難しいと思いますが、鶴住居のコミュニティが完全に再生したとは言えないのではないのでしょうか。コミュニティの再生は不完全であったということが予想出来ます。以上の2点の状況からは、2つ目と3つ目の生活再生のための条件だった住まいとコミュニティの再生は途上であったと言えます。

行政視点、また市民視点から釜石大会のこれまで検討してきた遺産をまとめますと次の4点になります。これは釜石大会開催されたその直後の検討なので、これから時間が経過することによってまた違った遺産が浮き彫りになってくると思いますが、これまでの検討では釜石大会が釜石の復興にポジティブな影響を及ぼしたものの、その遺産を批判的に捉えた場合には先に紹介したメディアによって暗示された震災復興という状況は完全に果たされていなかったと、復興の途上であったと言えると思います。こういった釜石大会の遺産を検討すると、メガイベントは、ラグビーワールドカップは地域の社会的課題を解決する万能薬ではなかったという点は明らかになりました。

こうした釜石大会の検討を元に、最後に東京オリパラの現状を考えてみたいと思います。東京オリパラは開催都市である東京都と、主な被災地、壮絶な被災にあった東北地方とが遠く離れているという点だけではなくて、多様で複雑な被害を受けた地域、つまり原発事故であったり、津波被害であったり、そういった多様な被害を受けた地域を対象とするという意味で、開催都市と被災地が重なっていた釜石大会以上に復興への貢献は難しいように思います。遠く離れているだけではなくて、多様な地域を復興させなければならない。「復興五輪」の実現は難しいということは、釜石大会の検討から指摘出来るように思います。

そうした難しい東京オリパラを震災からの復興という結果に結びつけるためには、日本の叡智、国際的な叡智を集結させて取り組む必要があると思いますが、復興に向けてオリパラを具体的に活用しようとする取り組みを私自身見たことはありません。トップアスリートの被災地訪問ですとか、ホストシティ、そういった取り組みはありますが、先程お話した復興の意味、暮らし、住まい、コミュニティの再生に直接寄与しようという取り組みは無かったように思います。しかも、最近のオリパラの動向を見ると、新型コロナウイルス蔓延の中、どのように安心・安全の大会を実現するかどうかという点が注目され、「復興五輪」という開催意義が、もうすっかり忘れ去られているように思います。

「復興五輪」が掲げられ、招致が進められた2011年その当時から東京オリパラと震災復興とがなかなか結びつかない実態が、研究者であったりジャーナリストから復興を言い訳にしている

と批判されていました。それがコロナの騒動、新型コロナウイルス蔓延、安心・安全な大会の実現という議論が高まり、復興五輪という言葉が忘れられた点を鑑みると、復興を言い訳として位置付けていた東京オリパラの態度が鮮明になったように思います。掲げた「復興五輪」という開催意義を忘れた、あまりにも身勝手な東京オリパラの現状は、菅首相であったり、小池都知事だけの責任ではないと私は認識しています。私もそこに加担しているという意味です。なぜなら私はメガイメントと震災復興を2012年からテーマとして研究と実践も進めてきたわけですが、復興五輪に対して正直何も声を上げてきませんでした。ということは、「復興五輪」という構想に対して少なくとも消極的賛成に組み込まれたということだと思います。そうしたことを私自身の位置付け、この身勝手さを今日の発表を準備する中で痛感しました。釜石の検討を通じて、スポーツメガイメントを活用する震災復興の実現がなかなか難しいという点だけではなく、東京オリパラに際して被災地や被災者を利用する身勝手さを痛感したということです。そういったことに気づいた私が、これから東京オリパラとどう向き合えばいいのかということは正直、答えが見つかってない状況です。「復興五輪」の開催意義だけは忘れずに東京オリパラと関わっていきたいと思います。但し、その具体的な私の態度という点に関しては、この後も皆さんとも議論を通じて少しでも具体的にしていきたいと考えています。今日はありがとうございました。以上が私の発表となります。

○**小林** 向山先生、ありがとうございました。長期に渡る、およそ10年近く、釜石フィールド調査を行われた先生ならではの非常に重厚かつ丁寧な考察に敬服致します。また、東京2020に対する慎重なご見解なども最後の方でお述べになり、そこに消極的賛成派の一人として、実は自分も知らず知らずのうちに組み込まれてしまっていたのではないかと自省の心までご指摘頂きました。これは兎にも角にも向山先生のお人柄だと思うのですが、今回の講演全般に渡り、非常に我々に問いかけてくるものがあつたかと思えます。

ここからは、フロアで本日ご参加頂いている皆様より、どのようなことでも結構ですので、向山先生にご質問頂ければと思いますが、いかがでしょうか？

○**ナカムラ** 同志社大学で博士課程の後期課程のナカムラシュウヘイと申します。向山先生、今日のご講演ありがとうございました。1つ質問させて頂きたいのですが、先程、釜石の現状として、若い方がかなり少なくなり、高齢者の方が多いというお話を伺いました。今回のコロナウイルスの性質上、高齢者の方が重篤化しやすいという話もメディアで聞いているのですが、この状態でもオリンピックが開催されて、外国から人が入国することに関するリスクについて、何か情報はお持ちでないでしょうか。

○**向山** ナカムラさん、ご質問ありがとうございました。新型コロナウイルスが蔓延する状況の

中で東京オリンピックがどういった影響を及ぼすのかという点に関して、専門家や関係者の発言というのは、私は残念ながら聞いていません。私もナカムラさんと同じで、たぶんメディア、ニュースですとか新聞を通してしか分かっていません。安心・安全な大会をやります、そこしか分からないのですね。ですので、開催の是非に関して、コロナ禍の現状を鑑みて判断することは私自身も難しい状況です。

○ナカムラ ありがとうございます。

○小林 他の方、ご質問、コメントのある方、どうぞ遠慮なくご発言を頂ければと思います。それでは、河原さん、お願い致します。

○河原 日本スポーツ振興センターに所属し、中央大学でも非常勤講師させて頂いています、河原と申します。向山先生、本日は貴重なお話どうもありがとうございました。大変勉強になりました。質問なのですが、いわゆるメガイベントという一過性のものに対して、どう住民の方々が活用されたかという点については、先生のおっしゃる通りだと思います。その他方では、その後の釜石、ラグビー、特に釜石の土地柄もありますけれども、住民の方々、特に影響を受けた地元の方に対して、ラグビー、スポーツ自体がどのように生活の中に根付いているのでしょうか。今日の趣旨とは少し外れるかもしれませんが、何か見えてきたものがあれば、もう少し教えて頂きたいと思います。

○向山 河原さん、ご質問ありがとうございます。そうですね、釜石におけるスポーツの位置付けということだと思いますけれども、そうした質問に対する答えは2つあって、1つはラグビーのまちという一面と、そうではないという一面です。先にそうではない一面を少しお話ししたいと思います。ラグビーのまち、釜石で「ラグビーの人」である向山がインタビューすると、「ラグビーのまちじゃないよ」といった話もよく聞くんですね。「僕の地区は、私の地区は、『野球の方が盛んだ』と。「野球の方がラグビーよりも競技人口も多いし、野球の方が強い。甲子園にも行っただろう」と。「他の市町村と同じでサッカーも人気だ」と。そのような話をされます。もう1つは、これは女性の方ですが、「ラグビーワールドカップは別物」とお話されていて、いろいろな意味があると思うのですが、やはりラグビーが生活に根付いてないということの1つの現れかなと思います。それがラグビーのまちではない一面です。一方でそうは言いつつも、釜石では「釜石がラグビーのまちか、ラグビーのまちではないか」という議論が成り立つんですね。「私は違うと思う」、「俺はそうだと思う」、そんな議論が成り立つまちは無いと思います。たぶん僕の勤務地の龍ヶ崎市で、「ここはラグビーのまちですか?」という話をしてもその意味が通じないと思うんですね。でも釜石では、「いやちがう」、「そうだ」という議論が成り立つのが面白いところで、こういった点から釜石はラグビーのまちだと思っています。そ

こには7連覇の記憶もあり、それを皆さん、特に高齢者の方は覚えているということ。その記憶は鉄のネットワークとも繋がってるのですが、ラグビーのネットワークは全国に広がっていると。今回のラグビーワールドカップは全国からラグビーのファン、もしくは新日鉄のファンの方が応援に来られました。そう考えると、ラグビーの社会的位置付けを計るのに、競技力とか競技人数だけではなく、記憶とか人と人との繋がりとか、そういったものを丹念に調べていく必要があるのではないかなと。そういった調べ甲斐のある、スポーツの価値がある、力を持つのが釜石ではないかなと今考えています。

○河原 ご指摘の点、大変勉強になりました。どうもありがとうございます。

○小林 非常に分かりやすい形でご意見頂きありがとうございます。

次は、久保田淳さん、ご発言お願い致します。

○久保田 サッカーのFC東京で、今、フロントのスタッフをしております久保田と言います。普段は地域やまちの皆さんと繋がりを持つ役割をしています。向山さん、今日はいろいろとありがとうございました。お話を伺い、感想というか、質問が1つあります。ご講演の最後に復興という観点で、ラグビーの岩手、釜石の大会を振り返った時に、万能薬にはどうしても成り得なかった。人口が減少したり、コミュニティがなかなか元の通りに戻らないという話がありました。私は一方で、子ども達の感想の中に夢とか希望が見てとれた時に、これをどのように評価すべきかという点が気になりました。もちろん復興というところで考えた場合には先生は謙虚に語られていましたが、時間という視点ではどのように考えるかがポイントになると思っています。子ども達が大人になり次にどのような動きに繋がっていくか、そういう長期的な視点でまた違う答えが出てくるかもしれません。評価対象についても、もちろん釜石が基準にはなるのでしょけれども、釜石以外にも波及され、いろいろなものを与えてもらった方々も間違いなくいたのしょうから、その影響の評価対象はもっと広く捉えてもいいのかなと思えました。お話し出来る内容で、実際に釜石の地元の皆さんはその影響を今の時点でどんな感想をお持ちになられているのか、聞かせてもらえたらすごく嬉しいです。

○向山 久保田さん、ご質問ありがとうございます。今ご指摘された長い目で見た遺産に関してですが、まず1つ目、実は開催後の声というのがなかなか聞けてない状況なんですね。というのは、コロナが発生して、私自身も釜石に行けないという状況になっています。そういった点でしっかり追えていないというのが今の現状です。今ご指摘があった子ども達の夢とか希望とかそういった点は、本当に地元の方の言葉で言うと、「そういった機会はもう全く、殆ど無かった」と。都会に住んでいる子どもと違って、釜石に生まれた子ども達はそういった機会を得ることは無かった。但し、特に開催前は忙しいぐらい、交流に駆り出され、そういった機会が

持てたと。その影響はたぶん大きな効果を生み出すと思います。子ども達、数百人が作文を書いたりしますので、私自身もそういった作文を検討するなどして、また継続的なインタビュー等を通して、子ども達の成長、ワールドカップが及ぼした影響を捉えていきたいなと思っています。貴重なご指摘、ありがとうございます。

○小林 ありがとうございます。この質問に関係するところで、今チャットでシマザキさんから「その後のスタジアムの活用についてお伺いさせて頂けませんか」というご質問がありました。シマザキさん、ご発言よろしいですか？

○シマザキ はい、国際武道大学、シマザキと申します。よろしくお願い致します。本当に素晴らしい素敵な講演をありがとうございました。釜石の復興スタジアムですが、私も現地に行かせて頂いて、本当に素敵なスタジアムだなと思いましたが、やはり今後の活用の方法というのが、おそらくこの間はコロナの影響で殆ど活用が出来ていないのではないかと思います。今後の活用の方法等について、何かご存知のことがあれば教えて頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

○向山 シマザキ先生、ありがとうございます。鶴住居のスタジアムに関しては、行政が自分達で運営するのではなくて、他の方法で運営していこうと検討が進められているようです。ただ、今ご指摘があったようにコロナの影響があって、なかなか実現に至っていない、ペンディングの状態です。そういった中でも、開催直後だからなのかもしれませんが、修学旅行とか見学旅行等で防災教育を絡めてスタジアムを訪問する学生、生徒が居たり、ラグビーの合宿、そういったところでもかなり活用されていると伺っています。今そういった状況です。よろしいでしょうか？

○小林 はい、ありがとうございます。挙手されているオオサワさん、いかがですか？

○オオサワ 中央大学2年、商学部のオオサワリキトと申します。本日はありがとうございました。自分はラグビーをやっていて、以前からこの釜石市のスタジアムのことを知っていました。このスタジアムが作られた背景には、震災前に小学生、中学生達がこのスタジアムの作られる前の広場で遊んでいたというメッセージなどがあります。復興のメッセージは日本人には伝わると思うのですが、ワールドカップが開催された時に、外国の方にはちょっと伝わりづらいなと思いました。海外の方に向けて、そうした復興のメッセージを伝えるために釜石市の人達はどのような取り組みを行ったかを知りたいです。

○向山 オオサワさん、いい質問ありがとうございます。そうですね、釜石は行政も市民の方々も、釜石でラグビーワールドカップを行うことは、ラグビーの発展に貢献するということがあります。自分達が開催する意義については、被災の記憶と防災教育、その知見を大きく発信

すること、それは感謝の表明にも繋がるので、それを大事にしていました。そういったところで、先程10分程度の映像を見てもらったように、そこにも字幕が英語で出ていたと思いますが、英語での発信を推進されてきました。そういった多くのものを英語でも発信するようにした成果もあって、釜石大会はワールドラグビーでキャラクター賞、ラグビーの精神、助け合いとかそういったものを表す場所として表彰されたということと、もう1つはイギリスの新聞社、ご存知のようにラグビー発祥の国である英国の新聞社が選ぶ、世界のスタジアムの1つに釜石スタジアムが、鶴住居スタジアムが選ばれているんですね。そのようなところからも、釜石が取り組んできた、英語での釜石の感謝と防災の記憶の国際的な発信というものは一定程度果たされてるのではないかなと思います。

○オオサワ ありがとうございます。

○小林 はい、ありがとうございます。専修大学のイイダ先生が先程挙手されていたようにお見受けしたのですが、イイダ先生、何かございますか？

○イイダ 今日は大変貴重な講演、ありがとうございます。非常に興味深いと思ったのは、行政の戦略と住民が一致していく、特に行政が締め切り効果を上手く利用していくところと、その一方で住民が反対もあったのに同意していくプロセス、これは非常に興味深いところで、向山先生はこのプロセスは時間がなくて今日はお話し出来ないとおっしゃっていましたが、私自身としては、住民が行政の政策に同意していくこのプロセスというのがやはり非常に難しいところだと感じており、今日その点を是非伺いたかったです。ご講演の最後に、住居などの物理的なデータに基づき復興はまだだと述べていらっしゃいましたが、この点はラグビーというものが、復興という方向性、ベクトルに向けて引いたトリガーになっていたという判断をされているのか、まずは教えて頂きたいと思います。

2点目が、私も釜石が連覇したラグビーを知っている世代なので、ラグビーイコール釜石というのはピンときます。釜石にはやはりラグビーの記憶が残っているのだと思います。先程久保田さんの方から、子ども達の記憶という話がありましたが、イベントの開催自体は一過性のもので、この記憶の継続が実は非常に大切なのではないかと考えています。私は諏訪のお祭りのフィールドワークをしているのですけれども、その7年に1回のお祭りの記憶が会話を生み出して、人をそこに集めるというプロセスを生み、そして、「おらがまち」という意識を作っているのを見ると、この釜石市自体とか、スポーツ界というか、ラグビー界、釜石や東北のラグビー協会など、そうした組織がこの記憶を継続させる方向に、この大会をトリガーとしてラグビーを前向きに捉え、何かアプローチをしていくのかどうかで、この先に差異が大きく出てきて、この結果、後から振り返った時にこのワールドカップの意味が評価されることになる

のではないかと思います。そういう意味では、先程久保田さんがおっしゃってた時間軸という視点が非常に大事になり、それが今風な言葉で言うとレガシーということになるのかなと思いつつ聞いていました。少し長くなりましたが、この2点、お聞かせ頂ければと思います。

○向山 イイダ先生、ありがとうございます。まず1点目のラグビーワールドカップが釜石の復興の方向性としての役割があったのではないかっていう点ですが、確かにそういった役割があったと思います。方向性というか、開催の副次効果ですね。インフラなんですけれども、遅らせないようにですね。それは例えば東京都の都市開発、再開発とは違って、もう全てを破壊された中で、インフラという本当の生活の基盤ですから、それを遅らせずに実現出来たことは、我々が考える以上に大きな意味があったと思います。それがどういった影響を及ぼしていくのか、例えば複合産業都市化に向けてどういった影響を及ぼしていくのか、また違う可能性を見出していくのかというのはこれからしっかり見ていきたいと思っておりますので、今はお答えすることが出来ない状況です。

2つ目のラグビーの記憶に関してなんですが、ご指摘の通り、子ども達は「ラグビーのまち釜石」と掲げられた時、お父さんお母さんに「なんでラグビーのまちなのか」と聞いたそうです。市長にも立候補の理由を聞いたのですけど、その時に「ラグビーの匂いが今ちょっと残っている」と。だからその匂いを消さないためにもラグビーを、ワールドカップやるんだということをおっしゃっていました。そういうことを考えると、ラグビーワールドカップを行ったことによって、今の子ども達もラグビーのまちであることを経験したと思うんですね。ということは、無くなりかけてた、高齢者の方が亡くなって、記憶を持っている方がいなくなり、釜石のラグビーのまちとしての記憶が無くなっていきそうな時に、大会を開催したことで記憶が繋がってラグビーのまちとしての釜石という持続性が一定程度高まったのではないかなと思います。それを継続させる取り組みなのですが、先程ご紹介した行政の映像、あれはラグビーのまち推進室というところが担当して作ってるんですね。ラグビーのまち推進室をワールドカップ後に設立していますので、釜石行政としてもラグビーのまちというその記憶を継続させるような取り組みを今進めているところだと思います。この点に関しても継続して調査していきたいと思っております。ありがとうございます。

○小林 ありがとうございます。チャットにて、山梨学院大学の小山先生から「ご質問させて頂ければ」と入っております。小山先生、どうぞ。

○小山 山梨学院大学の小山と申します。本日は向山先生、ご講演頂きありがとうございます。早速、質問なんですけれども、先程のシマザキ先生の質問とも重なるところがあるのですが、スタジアムの維持ですね、今後の維持管理については、行政からの補助というものは全く

受けないということでしょうか？

○向山 はい、ありがとうございます。その点に関してダイレクトに聞いたことは無いのですが、私がこれまで行政の方とお話した感触からお話すると、補助無しでやっていくことは難しいだろうと、そこで収支を合わせていく、マイナスが無いようにしていくことは難しいという認識を持たれているように思います。

○小山 では、何らかの形で少しは市の方というか、行政の方からもサポートは頂きながら維持していくというような流れになりそうですか？

○向山 そうですね、3千万、4千万とか言われている維持費ですけれども、それは負担するつもりと言いますか、それを下げていくような試みを今進めていらっしゃるわけではないかとみています。

○小山 はい、分かりました。以上です。ありがとうございます。

○小林 はい、ありがとうございます。他にいかがでしょうか。もしフロアからならいようでしたら、実は3月の下旬ですか、コロナ禍でなかなか長期的に滞在ができないという調査上の大きな制約を受けてきたのですが、向山先生が短期で、1泊2日で釜石に久しぶりに行かれるということで、その時に同行した研究者の方がお2人、今日ここにいらっしゃいます。もし差し支えなければ、スポーツ法学がご専門の武田さんの方から、コメントもしくはご質問等あればご発言頂ければと思います。

○武田 はい、小林先生ありがとうございます。武田です。私の方からは、向山先生のお話を伺ったうえで少しコメントさせて頂きたいと思います。皆さんにも一緒に考えて頂ければと思います。

向山先生には開催地目線であるとか、住民目線であるとかっていうところからの知見をお話頂いたと思いますが、僕はもう少し広げてみて、考えてもいいかなと。誰のためのイベントなのかとか、レガシーとか、そういうことを考えるに当たって、メガスポーツイベントのステークホルダーとか、ガバナンスとか、そういう視点を加えてもいいかなと思っています。メガスポーツイベントって、その中心の運営に関わっているステークホルダーだけでも、例えばラグビーの場合をとってみても、国際競技団体であるワールドラグビーに始まり、国内の組織委員会、開催地の自治体、協議会、住民という形で様々なステークホルダーが関わっているので、それぞれに計画されたレガシー、求めるものがある、それぞれの思惑があって、ということは今日先生にお話頂いた通りだと思うんです。そうすると、なかなかそれだけ沢山居ると、ガバナンスが効かないというか、統制が取れなくて、結局はそれぞれの思惑が重なり合う部分でしか連携したり協力したり出来ないのではないか、そういう厳しい面がメガスポー

ツイイベントにはあるのではないのかなと僕は思っています。そうすると最終的に取り残されてしまうのって、きっと開催都市の住民なのかなというのは1つ問題として挙げられると思っています。一番パワーが無いですね、地域の住民というのは、釜石に実際に、先程紹介があったように伺ってみて思ったのですけれども、まるでこう何と言うか、夢の跡みたいなのところもあるわけです。スタジアムであるとか建物というのは新しいものが多く、とてもまち並みはきれいなのですが、一方でまちの中に人は少ないなと思いましたし、活気があると言われると、そういう印象でもないですね、私が受けた印象としては、経済効果もきっと一時的だったのだろうと、住民にメガスポーツイベントとしてのラグビーワールドカップの恩恵がどのようにもたらされているのか、還元されたという印象は正直受けませんでした。

こうした視点から東京オリンピックを改めて見直してみても、誰のためのイベントなのかということを考えてみても、IOCであるとか、そういったところに振り回されているのは報道されている通りですし、開催都市である東京もプレゼンスを失っているのかなと、組織委員会も含めて3者でとか、あるいは5者でどうやって責任を取るのかなすりつけあいをしているように見えてしまいます。そこに国民とか都民の安全という意識は欠如しているのではと、国民や都民というのが置き去りにになっているのではと強く感じてしまいます。こうしたことも、もしかしたら負の遺産として残っているかな、なんてことを危惧したりもしていますね。つまりそれぞれの組織なりのガバナンスという話においては、僕はスポーツ法学を勉強している身として、近年学問的にも叫ばれていて、目が行き届いてきたことなのかなと思うんですが、一方でそうしたメガスポーツイベントとなると、1つの組織では済まなくて、協力連携という言葉よりは、より強固なガバナンスが必要になってくるのではないのかなと思います。そこがまだまだ出ていないのかなと、メガスポーツイベントの中で渦巻く思惑の結果として、どういうレガシーが作られていくのかということに関わってくるのかな、なんていうことを思った次第でした。長くなりましたが、私からのコメントとさせていただきます。ありがとうございました。

○小林 ありがとうございました。向山先生、今のコメントに対して何かございますか？

○向山 そうですね。武田先生がおっしゃったように、グローバルからローカル、すごくたくさんの方のステークホルダーが居て、その思惑という点は、私も釜石大会でも感じています。1つはスタジアム建設費が40億円を超えたことですね。当初30億円程度だったんです。その10億円はいつ上がったかという開催決定後なんですね。これは想像の域を脱しないんですが、つまり開催前は、行政は仮である程度具体的にしたスタジアム仕様で立候補書類を提出したのですが、開催決定した後はワールドラグビーの国際的な組織の主催者の規定に基づいてスタジアムを整備していかないといけない。そこには大きなヒエラルヒーの関係が出来上がってきますの

で、整備費の増額に繋がるスタジアム整備に関するワールドラグビーからの要請になかなか開催地は抗えないという点があると思いますので、武田さんのおっしゃる通りです。それを釜石を通じて感じました。

○小林 ありがとうございます。当保健体育研究所の研究員をされています、商学部の先生でスポーツマネジメントをご専門されている関根先生も、先の武田さんと一緒に釜石に、向山先生に同行されたと思うのですが、先生の見地からコメント等、ご質問含めて何か頂けませんか。

○関根 はい。中央大学商学部の関根と申します。よろしくお願ひします。私も3月に向山先生と一緒に釜石行かせて頂いて、今、武田さんがおっしゃったような「祭りの跡」といった感覚と一緒に味わってきました。そうした中で今日向山先生に情報を整理して頂き、生活再建というレベルまでに影響を与えられているかどうか、そこに疑問符が付くようなメガイベントの在り方に気付かせて頂き、すごく勉強になりました。ここまでのディスカッションでかなり大切な論点が出てきていますので、それを参考にさせて頂きながらコメントと質問をさせて頂きたいと思います。まず1つ目は、久保田さんやイダ先生、シマザキ先生がおっしゃっていた「時間軸」という視点からの分析がすごく大事になると思っています。メガイベントを開催したその時点のみでレガシーを考えるのではなく、生活再建というレベルまでに影響を及ぼしていくのかと検討するときには、長期的な視点から、もう少し長い目線で評価しなければいけないのかなと思っています。というのも、向山先生はチャレンジする心や、ラグビーのまちというシンボル等、目に見えないレガシーを得たとおっしゃっていましたが、イダ先生が指摘するようにそれを持続させるという視点が大事になると思いました。それが持続していくことで、例えば、そのソフトなレガシーに可能性を感じて出戻りで鶴住居に戻って来られる方が居たり、ラグビーのまちに魅力的に感じて地域のまちづくりに関わる人が増えたりするなど、もしかすると長期的に生活再建やコミュニティの活性化というレベルまで、このラグビーワールドカップによる影響を波及させる可能性があるのかなとも考えられます。ただ、レガシーを維持していくことは大変な作業だとも思いますので、今後持続させていくために何が必要か、向山先生がお考えになっていることを是非教えて頂きたいというのが1つ目の質問です。

もう1つは、先程の武田さんのお話とも少し重なるのですが、中央の思惑、この釜石という地域の外側にある思惑というのをいかに捉えるかについても論点になると思います。釜石の人達にとってみれば、自分達の地域のためにうまく戦略性を持ってイベントを活用したということなんだと思うのですが、外部の目線で見ると、その地元の人達の行為が、最終的にはワールドカップの成果やレガシーだと主催側によって語られてしまい、ワールドカップというメガイ

イベントを正当化することに繋がっていくというストーリーがあると思うんです。こうした構図は、オリンピックでも一緒だと思っており、全国各地の人達が地域のために実践していることが、オリンピックのレガシーだと語られ、その大会自体を正当化することに繋がられていってしまう。しかし、そのオリンピックの主催サイドの内実を見てみるとかなりグレーなところがあって、国際的な組織では汚職が起きたといわれていますし、大企業などへの「ばら撒き」だという批判もありますし、政権サイドの選挙対策として活用されているような疑問も寄せられていたりして、手放して賛成するわけにはいかない。そうした大会の運営手法への疑念が寄せられる中で、大会本体のためというよりは地域のために運営に関わろうとしても、その行為自体が最終的にはレガシーという語りに回収され、大会を正当化することに繋がってしまうのです。こうした主催側の思惑をいかに捉えて、そうした構造の中でいかに地域住民として行動したら良いのかは、すごく悩ましいと思っています。釜石のケースを踏まえて、そうした主催側の意図と、それとすれ違う住民の意図という構造の中で、オリンピックやメガイベントというものを考える際に必要になることとは何かについて、お考えがあれば教えて欲しいと思います。答えにくい質問で恐縮ですが、お話を伺いながら考えていたということです。よろしくお願います。

○向山 関根先生ありがとうございます。まず1点目の長い時間軸での遺産の検討という件ですが、やはり人と人とのネットワークはこのラグビーワールドカップをきっかけに、もちろんその前に東日本大震災で、多くのネットワークが釜石と結ばれましたが、それを強化するという意味でラグビーワールドカップは貢献出来たのではないかなと思います。その1つの事例として、ラグビーワールドカップの公式ボランティアですとか、独自ボランティアの方が、釜石のために何らかの活動をしていこうと今もネットワークを保たれています。残念ながらコロナのために活動は出来ていないのですが、そういった方々が残っている。他にもそこに現れないいろいろなネットワークが生まれていると思いますので、それが釜石にどういう影響を及ぼすかという点は注目すべき点だと思います。加えて釜石市は人口減少、少子高齢化が進んでるのですが、それに対して人口を増やそうという取り組みはされていないです。もう減っていくのはしょうがない、それをいかに緩やかにしていくのか。もう一点は関係人口を増やしていくと、何かあった時に釜石のために頑張ってくれる、関心をもってくれる人を増やそうということで、オープンシティ戦略というものを進めています。そういった点とも、今回のラグビーワールドカップの開催というのは関連すると思いますので、政策面での追跡も必要になってくると思います。

2点目、ステークホルダーの思惑の相互作用ですけれども、2019年に開催されたラグビーワールドカップ自体がアジアのラグビーの市場開拓を目指して日本が開催権を獲得しました。で

も、そういった意味からも主催者であるワールドラグビーと言うんですけれども、その思惑は強い影響を及ぼしています。オリンピックやサッカーワールドカップと同じように、社会の良きものとして、グレーなところを隠すという意味でも、批判的な研究者はそう指摘しますけれども、そういった意味でも社会に良きものとしての立場を鮮明に発信するということで、釜石の開催はワールドラグビーにとって良い材料になったと思います。しかしですね、それ自体も釜石は理解していて、立候補をお願いする時、主催者側に、「釜石で開催させれば、ラグビーの価値が上がるよ」と。なぜならば「復興を促進するんだから、後押しするんだから」と言ってるんですね。ですので、両者の間に大きなパワーの差はあるんですけれども、それでもそこに決して一方的ではない交渉が行われている点はすごく興味深い点だと考えています。そうした相互作用を通じて結果が生まれてくると思います。最後の東京オリンピックとか大きなイベントをどのように考えていくのか、遺産をいいものにするためにどう考えていくのかという時に、私の立場から言うと、そういうふうなグローバルからローカルまでいろんな組織の相互作用ありますけれども、そこにはあなたも含まれているんだ、私が含まれているんだという視点を持つことだと思うんですね。大きなワールドラグビーだからとか、釜石が相手だから難しいというのではなくて、関係する一員としてやはり積極的に発言していく、私の反省でもあるのですが、そういった姿勢が必要になってくると思います。ですので、東京オリンピック、「復興五輪」というものを掲げて、そこに参加しているわけですから、そこにこういう議論をしているわけですから、あと本当に数日ですけれども、それでもそういったことに対してどう抵抗していくか、対抗していくか、その後もどう関わっていくのかということをも自分ごととして考えていくことが、やはりいいものを生み出すために必要じゃないかなというふうに考えています。

○小林 ありがとうございます。それでは長時間に渡り、向山先生ありがとうございました。

ご質問頂いた、ご意見頂いた方も、非常に刺激的な、一面的に捉えられがちなメガスポーツイベント、今我々が直面する状況、オリパラ、まあ開催されるかどうか微妙な情勢ですけれども、そういった我々が今置かれているものに対していろんなものを釜石の事例から触発して頂けるようなお話を伺うことが出来ました。改めてお礼申し上げます。

僕の方として、僭越ながらまとめのようなものをやればと思ったのですが、残念ながらそういう、これちょっと見えますかね。実は、皆さんの議論を伺っていて、この本がぼっと浮かんだんですね。これ『最底辺の10億人』っていう、ポール・コリアーという、オックスフォード大学でアフリカ経済研究所の所長をされていた方の本なのですが、その方の一節がぼっと浮かんだので、最後にまとめになるかどうか分かりませんが、ちょっと皆さんにご紹介させて

頂きたいと思います。読み上げます。

開発への熱狂はロックスターやセレブやNGOによって引き起こされる。開発への熱狂は底辺の10億人の国の苦境に焦点を合わせ、このおかげでアフリカやG8の議題に登った。しかし当然のことながら開発への熱狂はスローガンやイメージや怒りによって突き動かされるために、メッセージは単純化されていなければならない。底辺の10億人の国の窮状は道徳的な単純化に向いているが、その解答までを単純化することは出来ない。それは同時にいくつかの政策に関わる問題であり、この政策の中には直感で片付かないものもある。こうした政策の策定を開発の熱狂に期待することは出来ない。それは時には知性を伴わない熱狂に過ぎないこともあるからである。

今日、向山先生のご講演、加えてご参加頂いた皆様のご発言を踏まえて、まさにエモーショナルな部分だけでは片付かないもの、エモーショナルになって単純化されればされる程、人々には届く。まさしくスポーツメガイイベント、我々の東京2020、そんな風潮が強かったのですが、幸か不幸かコロナ禍という前代未聞の事態に直面するに当たって、いろいろな側面が見えてくるようになりました。なので、今日のご講演を皆さんどこかにご利用頂いて、実際開催されるのか、又は中止されるのか、分かりませんがスポーツメガイイベント、一面的に捉えることだけはご遠慮頂いて、そこにはいろいろなステークホルダー、いろいろな思い、いろいろなことが託されているんだ。しかしながらそれはしばしば情緒的に流される、というようなそれに対するコリアーの警鐘を最後に皆さんにご紹介して、本講演のまとめとさせていただきます。

本当に長時間に渡りお付き合い頂きまして、ありがとうございます。保健体育研究所としてはですね、実は史上初めてオンラインによるシンポジウムということで、どのぐらいのお申込み者数があるのか不安ではありました。ところがこちらの不安をよそに、お申込み者数が100人をオーバーするという盛況振りを見れたということに、非常に感慨深く感じております。これもひとえに事務局を始めとする市場所長、向山先生のご尽力があったものと思います。これに懲りずに、また向山先生におかれましては今後ともご支援・ご協力の方を承れればと思います。本日はありがとうございます。

演者プロフィール**向山昌利 氏**

流通経済大学准教授

同志社大学を卒業後、NECグリーンロケッツなどに所属し、ラグビー日本代表のバイスキャプテン、日本A代表のキャプテンとして活躍。引退後、研究者としてのキャリアをスタート。研究テーマは「開発とスポーツ」「スポーツ・メガイベントと震災復興」。釜石市には震災後の2012年から足を運び、ラグビーワールドカップ後の現在もフィールドワークを続けている。日本ラグビーフットボール協会普及・競技力向上委員会国際協力部門長、一般社団法人子どもスポーツ国際交流協会代表理事を務め、ラグビーを活用した社会貢献活動も実践している。

中央大学保健体育研究所 オンライン開催 公開講演会

オンライン会議ツール
Zoomを活用して、
ご自宅などから参加可能です。

メガイベントは開催都市に何を残すのか ～2019年ラグビーW杯を開催した岩手県釜石市のケースから～

「何のための、そして、誰のためのスポーツイベントなのか。」

コロナ禍によって延期された「東京オリ・パラ」の開催を直前に控え、こうした視点から大会開催の是非が問われ続けています。そこで、本講演会では、日本で開催されたメガイベントである2019年のラグビーW杯にフォーカスし、イベントによるインパクトの実際に関する考察を深めていきます。開催地となった都市にはどんなインパクトが残ったのか、スポーツ・メガイベントによるレガシー(遺産)のあり方に迫ります。

特別講師として、「震災復興」と「スポーツ・メガイベント」の関係性について研究をされている向山昌利先生をお招きし、ラグビーW杯の象徴的な開催地となった岩手県釜石市の事例についてご紹介いただきます。

講師 向山 昌利 先生 流通経済大学 准教授

同志社大学を卒業後、NECグリーンロケッツなどに所属し、ラグビー日本代表バイスキャプテン、ラグビー日本A代表のキャプテンとして活躍。引退後、研究者としてのセカンドキャリアをスタート。研究テーマは「開発とスポーツ」「スポーツ・メガイベントと震災復興」。釜石市には、震災後の2012年から足を運び、ラグビーW杯後の現在もフィールドワークを続けている。日本ラグビーフットボール協会普及・競技力向上委員会国際協力部門長、一般社団法人子どもスポーツ国際交流協会代表理事を務め、ラグビーを活用した社会貢献活動も実践している。

日時：2021年7月5日(月)16:00～18:00

開催方法：Zoomによるオンライン開催

応募〆切：7月1日(木)

※参加方法の詳細はご登録いただいたメールアドレスにご案内申し上げます。

対象者：学生・教職員のほか学外者

※申込者多数の場合、参加をお断りすることがあります。あらかじめご承知おきください。

参加費：無料

主催：中央大学保健体育研究所

お申し込みフォーム：

お問い合わせ：042-674-3914

<https://forms.gle/9ydb3kx5PStb3KLa6>



↑お申込みは
こちらからどうぞ

